慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ソレルスの中国 (4) : オリエンタリズムの彼方に
Sub Title	La Chine sollersienne (4) : au-delà de l'orientalisme
Author	阿部, 静子(Abe, Shizuko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.71 (2020. 10) ,p.137- 161
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20201031-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ソレルスの中国（4）
――オリエンタリズムの彼方に――

阿　部　静　子

0.0. はじめに

「早くから中国に関心を抱き、その後も一貫して興味を持ち続けた、フランス出身のヨーロッパ作家」[1] ――数 10 年後、中国の事典にこう書かれることを夢見るフィリップ・ソレルス――、そのソレルスの一貫して衰えることのない「中国」に対する関心について、本論考では 3 回にわたって考察を試みてきた [2]。エクリチュールの探求者として数々の実験的作品を生み出し、文芸誌「テル・ケル」[3] を足場にアヴァンギャルドの活動を展開し、さらには独自の立場から閉塞の時代にむけて発信を続ける告発者としての足取りを、折々の発言および多岐にわたる作品群を手がかりにこれまで辿ってきたが、今回その軌跡を、ある懸隔をおいて見つめ直してみようと思う。

1）2008 年 8 月 29 日に筆者がインタビューした際の言葉（拙論「フィリップ・ソレルスへのインタビュー」『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』N° 49–50，2009 年 12 月，p. 278）。他にも著書の随所で繰り返し同じ言葉を口にしている。

2）拙論「ソレルスの中国（1）、（2）、（3）」『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』N° 58、2014 年 3 月、N° 60、2015 年 3 月、N° 62、2016 年 3 月。

3）「テル・ケル」誌は 1960 年、ソレルス他 5 名の若者がスイユ社から刊行した季刊文芸誌。雑誌を足場に前衛的文学活動を行った。「テル・ケル」に関しては、Philippe Forest, *Histoire de Tel Quel 1960–1982*, Éd. du Seuil, coll. « Fiction & Cie », 1995 および拙著『「テル・ケル」は何をしたか――アヴァンギャルドの架け橋』、慶應義塾大学出版会、2011 年を参照されたい。

エドワード・サイードが『オリエンタリズム』[4] で問題提起を行って一大論争を巻き起こして以来、西洋の側から東洋について語る場合に「オリエンタリズム」の概念は避けては通れない判断基準となってきた。それではその「オリエンタリズム」に照らしてみた場合、ソレルスの「中国」はどのようなものであるのだろうか？　それはいずれ「オリエンタリズム」の一種として既製の枠にくくられてしまうものなのか、あるいは「オリエンタリズム」を超える何らかの可能性を秘めているものなのだろうか。「ポスト・オリエンタリズム」[5] 時代に、ソレルスの「中国」が占める場所はあるのだろうか。

1つだけ言えることは、中国の思想・文化に特化したソレルスの「中国」はソレルスの終生の課題であるということである。それはソレルスにとってのの「中国」ではなく、ソレルスの「中国」であり、エクリチュールの問題、さらには「作家ソレルス」の存在と不可分に結びついて血肉化したもの、ソレルスの創作活動を考える際に抜きにしては考えられないものだということである。その中国の思想・文化について語る時、ソレルスは常に西洋と並置して語る。それは比較のためでも、ましてや一方が他方より優れていることを強調したいためでもなく、あくまでもそれぞれの存在をあるがままに示し、各々の特徴を際立たせることを目的としている。ソレルスのこのような対位法的発想は創作活動の随所に見られるものであるが、はたしてそれは西洋 / 東洋という永遠のアポリアに幾分かの光明をもたらすものだろうか。ソレルスの近年の活動をも手がかりに、改めてこうした観点からソレルスの「中国」について、その現代における意味について考えてみたい。

4）エドワード・W・サイード『オリエンタリズム　上・下』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社ライブラリー、1999、1996 年。

5）例えばハミッド・ダバシの『ポスト・オリエンタリズム――テロの時代における知と権力』（早尾貴紀ほか訳、作品社、2018 年）では、サイードを引き継ぎ、ヴァルター・ベンヤミンを参照して議論を発展させている。

1.0. ソレルスの「中国」はオリエンタリズムか？

1.1.「作家ソレルス」と中国

> Papa, en faisant tourner le globe de la bibliothèque, me montre la tache allongée jaune clair où ils marchent déjà au soleil pendant qu'ici il fait nuit. La large étendue jaune foncé, en revanche, à gauche, est la Chine[6].

ソレルスの中国との最初の出会いは、幼時にまでさかのぼる極めて個人的な体験だった。幼い心に鮮やかな印象を残した「中国」は、その後、リセのイエズス会士の語る魅力的な中国話を経て、時をおかずしてソレルスをマテオ・リッチや老子の読書へと駆り立て、やがてそれは「中国」の刻印を押された最初の実験的作品、『ドラマ』[7] に結実することになる。『ドラマ』は易経の陰と陽にヒントを得て構想され、「作者＝話者」と「彼」それぞれが交互に語る 64 の断章から成っており、64 のシークエンスは易経の六十四卦に該当するものと考えられている[8]。ロラン・バルトは『作家ソレルス』[9] の中で、ソレルスが『ドラマ』において、伝統的な一人称小説にみられる問題、同一人間の中に叙述する者と行動する者の 2 人の行為者（アクタン）がいるという「不誠実」を、叙述者を叙述というただ 1 つの行為に吸収させることで抜本的

6）Philippe Sollers, *Studio*, Gallimard, 1997, p. 38.（フィリップ・ソレルス『ステュディオ』齋藤豊訳、水声社、2009 年）。

7）Philippe Sollers, *Drame*, Éd. du Seuil, coll. « Tel Quel », 1965; Gallimard, coll. « L'Imaginaire », 1990.（フィリップ・ソレルス『ドラマ』岩崎力訳、月曜社、2015 年）。

8）易経の陰・陽 2 種の横棒から成る八卦の組み合わせによる六十四卦。

9）Roland Barthes, « Drame, poème, roman » : in *Théorie d'ensemble*, Éd. du Seuil, coll. « Tel Quel », 1968, p. 25 (réédition : *Sollers écrivain*, Éd. du Seuil, 1979).（ロラン・バルト『作家ソレルス』岩崎力・二宮正之訳、みすず書房、1986 年）。

に解消していると言っている。

> (...), ces actants entretiennent entre eux des rapports difficiles, (...); comme les deux moitiés de l'androgyne platonicien, le narrateur et l'acteur courent l'un après l'autre, sans jamais coïncider ; cet écart s'appelle *mauvaise foi* et, depuis longtemps déjà, la littérature s'en préoccupe. A cet égard, le projet de Sollers est radical : (...) : des deux moitiés traditionnelles, l'acteur et le narrateur, unies sous un *je* equivoque, Sollers ne fait à la lettre qu'un seul actant : son narrateur est absorbé entièrement dans une seule action, qui est de narrer ; (...)[10] .

その結果、《言表行為（エノンシアシオン）》の主体は揺さぶりをかけられ、一方読者は、現在進行中の叙述に対面することになるのである。バルトはさらに、書物を変えることが「人生を変える」ことであるならば、『ドラマ』はその力を持っているとも言っている[11]。ソレルスは『ドラマ』で、「中国」にかたちを借りて、「作家ソレルス」を生み出すための極めて個人的な実験を試みたと言えるだろう。続く『数（ノンブル）』[12]、『法』[13] では、文中に漢字が使用されるなど中国との繋がりが一層明瞭に作品に反映されるようになり、やがて毛沢東の詩が自らの翻訳によって「テル・ケル」誌上に掲載されるに至るのである[14]。言語の内部に深く分け入って苦闘した体験は、自分の「中国」を思考の奥深くにまで導き入れ、内在化させる結果となり、それ以後のソレルスのエクリチュールに

10）*Ibid*., p. 29.

11）*Ibid*., pp. 27, 29, 31.

12）Philippe Sollers, *Nombres,* Éd. du Seuil, coll. « Tel Quel », 1968; Gallimard, coll. « L'Imaginaire », 2000.（フィリップ・ソレルス『数（ノンブル）』岩崎力訳、新潮社、1976 年）。

13）Philippe Sollers, *Lois,* Éd. du Seuil, coll. « Tel Quel », 1972; Gallimard, coll. « L'Imaginaire », 2001.

14）Philippe Sollers, « Dix poèmes de Mao Tsé-toung », *Tel Quel* n° 40, 1970.

決定的な役割を果たしている。『H』[15] さらには『天国』[16] において、聖書と老子、ジョイスとリオ河の亀[17] など、西洋と中国双方の様々なテーマが、膨大な引用を伴った句読点のないスピード感溢れる文体で語られており、内容と表現が一体となって、新しいフランス語によるエクリチュールが生まれることになったのである。

1.2. サイードの「オリエンタリズム」／ソレルスの「中国」

「オリエンタリズム」とは、一言で言えば「西洋の、西洋による、西洋のための」オリエントということになるだろうか。西洋が長年にわたってオリエントを威圧し、支配し、再構成するために用いた手法は、オリエント学と呼ばれる文献学の学問的伝統にのっとった周到かつ徹底したものだった。サイードは、オリエンタリズムについて考察する際にミシェル・フーコーの言説概念を援用し[18]、オリエンタリストによって作り上げられたオリエントが言説でしかなく、現実の外側に表象として、外在性としてのみ存在することを明らかにしている。オリエントとは、詩人・学者たちによって延々と築かれてきたテクストの世界、もの言わぬ世界であり、このロマン主義的観念の伝統の産物は、東洋支配を目指す西洋に変わらぬ「紋切り型」のオリエント[19] を提供し続けてきたのだった。フローベールが豊穣のシンボルとして描いたエジプト女[20]、ナポレオンのエジプト遠征に端を発するシャトーブリア

15）Philippe Sollers, *H,* Éd. du Seuil, coll. « Tel Quel », 1973; Gallimard, coll. « L'Imaginaire », 2001.

16）Philippe Sollers, *Paradis,* Éd. du Seuil, coll. « Points », 2001, *Paradis II,* Gallimard, coll. « Folio », 1995.

17）ソレルスは、その甲羅に文字を刻んで洛河（rivière Luo）の河面に浮かび上がってくる亀を、エクリチュール誕生の瞬間を象徴するものとして度々描いている。

18）前掲、エドワード・W・サイード『オリエンタリズム　上』p. 21。

19）フローベールの『ブヴァールとペキュシェ』第2部として構想された未完の作品『紋切型辞典』に描かれた現実から乖離した観念の繰り返しを、サイードはオリエンタリズムに当てはめている。同前、pp. 265–269、272–273。

20）サイードは、フローベールが出会ったエジプト人娼婦クチュク・ハネムが小

ン、ラマルティーヌの東方紀行、ユゴー、ゲーテによる、意識が現実にはヨーロッパを離れないままに具体的な経験を求めて旅したオリエント、さらにはT.E. ロレンスの『知恵の七柱』にみられる「裏切られた希望」、あるいは「嘆き悲しむオリエントの苦難の象徴」としての「帝国の代理人」ロレンス[21)]、などなど――。18Cから20Cにかけて、マルクス・エンゲルスによって少数者の覇権主義が暴露され、フロイトによって人間中心主義が武装解除されたとは言え、人文・社会科学がどれほどヨーロッパ中心主義につきまとわれていたかは計り知れない[22)]。サイードは、マルクスが、ゲーテの『西東詩集』中の、「この苦しみがわれらの快楽を増すからには、どうしてそれがわれらの心を苦しめよう」という一節に共感していることを見逃さず、こう断じる――「結局、最後に勝利を収めるものはロマン主義的なオリエンタリズムのヴィジョンなのだ」[23)]。ヴィーコをよりどころに[24)]、サイードはオリエンタリズム糾弾の手をゆるめることはない。

†

1974年4月11日、ソレルスとバルト、クリステヴァら一行5人は、共産主義中国に招かれた文化人グループとして中国に向かった[25)]。中国からも

説に登場する女性の原型（プロトタイプ）であり、クチュク・ハネムからいわゆるオリエント女性像を創造したのだと言っている。同前、p. 27ほか。

21）前掲、エドワード・W・サイード『オリエンタリズム 下』pp. 91、95。トーマス・エドワード・ロレンス『完全版　知恵の七柱』田隅恒生訳、平凡社東洋文庫、2008年。

22）アブデル＝マレク『民族と革命』からの引用。前掲、エドワード・W・サイード『オリエンタリズム　上』pp. 231–232。

23）同前、pp. 352–353。マルクスの引用は「イギリスのインド支配」（『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』1853年6月25日付け）。

24）サイードはジャンバッティスタ・ヴィーコを自分にとってのヒーローと呼んでおり（『知識人とは何か』平凡社ライブラリー、2004年、p. 105）、『オリエンタリズム』でも随所でヴィーコに言及している。

25）ソレルス等一行は3週間、北京、上海などを訪れ、工場、博物館、遺跡を見学し、演劇などを鑑賞して回った。

たらされた文化大革命のニュースは、フランス知識人の宿痾であった文化と政治の同時革命の夢を再燃させずにはおかなかった。それは5月の事件後の喪失感を補ってあまりあるものであり、当時フランス共産党と決別したばかりだった「テル・ケル」メンバーにとっても事情は同じだった。だが勇んで出かけた先に待っていたのは中国の現実からはほど遠い中国政府の作為に充ちたお仕着せツアーであり、メンバーは見世物のオンパレードに感動よりむしろ失望と疲労感を味わうことになった。帰国後メンバーは、中国側の演出が孕む欺瞞についてさまざまに報告している。そうした中にあってソレルスは多くを語らず、1人訪れた道教寺院の廃墟の様子や、朝何気なく目にした太極拳をする人々の無心な動きについて語っている[26)]。ソレルスはそれらのうちに、自らの奥深く温めていた中国を確認していたのだ。それは「あこがれ」でも「夢」でもなく、したがって裏切られることも嘆くこともない。帰国したメンバーを待ち受けていたのはバッシングの嵐だった。出発前、公然と毛沢東主義を標榜して憚らなかった「テル・ケル」は、現実の中国を前にして認識を改めざるをえなくなり、「テル・ケル」誌上で過ちを認め、方向転換することを宣言した[27)]。そうした苛酷な試練に直面しながら、それでも「テル・ケル」は活動を継続していった。後年ソレルスは、当時を振り返って語っている。「2度と中国を訪れることはなかった。行きたいとも思わない。自分を魅了するのは「内なる中国」なのだ」[28)]と。それは「オリエンタリズム」のフィルターを通して眺められた外在的な対象とは別物の、自らの生の根源、エクリチュールの根源と不可分の存在である中国なのだ。ところでサイードは、オリエンタリストが自分と同時代の東洋にも、人間にも

26）Philippe Sollers, *Les Voyageurs du temps*, Gallimard, 2009, p. 139, et Philippe Sollers, *Un vrai roman, Mémoires*, Éd. Plon, 2007, p. 125; Gallimard, coll. « Folio », 2009.（フィリップ・ソレルス『本当の小説　回想録』三ツ堀広一郎訳、水声社、2019年）。

27）« À propos du ‹ Maoïsme › », *Tel Quel* n° 68, 1976.

28）« Je ne suis jamais retourné en Chine. Pas envie. La Chine qui m'intéresse est une Chine intérieure. », « Shanghai: corps et silence », *Fugues*, Gallimard, 2012, p. 238.（強調引用者）

関心を持たないことを非難している。この非難は、恐らくソレルスにも当てはまるものと思われる。だがサイードが、『聖トマス・アクイナスの哲学』に寄せられた序文中の、「人類の全伝統を受容し集大成したもの」[29] という表現に異議を唱える時、ソレルスも同意見であるに違いない。というのは、トマス・アクイナスに対するソレルスの畏敬の念はゆるぎないものであるとしても[30]、老子に対する思いもそれにひけをとらないからである。『オリエンタリズム』はおおむね、イスラム世界を対象としているが、そこで展開されている西洋中心主義、自民族中心主義に対する異議提起は、それ以外の地域にも敷衍されるものと考えてよいだろう。

「テル・ケル」の活動の軸は、創刊当時から「エクリチュール」と「革命」だった。マオイスト時代、人民のために闘うべき時になぜ書き続けるのかと追求された時も自分たちが信じる道を変えることはなく、数々の苦難の時期にあってもエクリチュールを手放さずに、2 方向での探究を続けたのである。ソレルスの場合には、それに「中国」が深く関わっていた。中国に関する知識は、マルセル・グラネ、ジョゼフ・ニーダム、ファン・フーリック[31] 等の著書を通してだけでなく、中国語の学習をはじめ、易経、老子、荘

29）I.A. リチャーズが『孟子の精神論』（1932 年）の序文で、M. エチエンヌ・ジルソンの『聖トマス・アクイナスの哲学』英語版序文を批判的に引用しているもの。前掲、エドワード・W・サイード『オリエンタリズム　下』pp. 124–125。

30）ソレルスは後に述べるドミニク・ロラン宛ての手紙をはじめ、随所で聖トマス・アクイナスを引用しており、トマスはその異名、「天使博士 “docteur angélique”」にふさわしい、とも言っている。Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1958–1980*, Gallimard, 2017, p. 337. La lettre du 24 juillet 1979.

31）Marcel Granet, *La Pensée chinoise*, La Renaissance du Livre, 1934. Joseph Needham, *Science and civilization in China, 1954–2008*, Cambridge University Press, 1954 ～ .（ジョゼフ・ニーダム『中国の科学と文明』東畑精一・藪内清監修、新思索社、1991 年）。Robert Hans Van Gulik, *Sexual Life In Ancient China, a preliminary survey of Chinese sex and society from ca. 1500 BC. till 1644 AD*., E. J. Brill, Leiden, 1961.（R.H. ファン・フーリック『古代中国の性生活――先史から明代まで』松平いを子訳、せりか書房、1988 年）。

子などの読書によって直接中国に学ぶことで得られたものであり、オリエンタリストたちがオリエントに関する文献や文学作品を通してオリエントのイメージを作り上げていったのとは異なる。ソレルスは、パウンド、クローデル等[32)]、中国に馴染み深い作家の著作に親しみ、それらについて論じてもいるが、ソレルスの関心はそれにとどまらず、中国の詩・思想・文学・絵画に学んだ上に、さらにそれらについて、またさまざまな作品についても頻繁に論じかつ紹介しており、この双方向性はソレルスの作家活動の顕著な特徴となっている。作品中に中国が取り入れられることも多く[33)]、ソレルス作品の独自性を際立たせるのに役だっている。ソレルスのエクリチュールの中で「中国」は、異質なものとしてその特異性[34)]を保持したまま作品内で他の要素と並置されているのであって、そこに覇権主義や紋切り型が影を落とすことはない。

2.0. Lettres à Dominique Rolin

2.1. 2つで1つ

> Tu oublies peut-être une chose : que tu es la destinataire de Drame. Et que, par conséquent, tu es là, pour moi, tout le temps. Je nous vois maintenant un peu comme les dieux grecs assistaient du haut de

32)「テル・ケル」誌は1961年6号と1976年68号にパウンドの『詩篇』を掲載している。ソレルスはパウンドの詩の漢字の使用方法が装飾的であるとして、自身のやり方との違いについて語ってもいる。

33)中でも、道教思想を専門とする中国学者が主人公の『黄金の百合』と、荘子を大きく扱った *Passion fixe* が挙げられる。Philippe Sollers, *Le Lys d'or*, Gallimard, 1989.(フィリップ・ソレルス『黄金の百合』岩崎力訳、集英社、1994年)。Philippe Sollers, *Passion fixe*, Gallimard, 2000.

34)ソレルスはしばしば特異性の語を口にし、その重要性を強調している。2017年、筆者が築山和也氏と行ったインタビューの際にも、不規則性と特異性に関して熱く語っていた(拙論「フィリップ・ソレルスへのインタビュー」『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』N° 66, 2018年3月, pp. 121–125を参照されたい)。

l'Olympe à l'Iliade ; (...). Au fond La Maison-La Forêt[35] et Drame sont un seul et même livre (...). Ton livre est très beau et important, comme j'espère que le mien pourrait l'être[36] .

Drame, au fond, n'existe que par toi et pour toi. (...). Je pense à toi, et à La Maison, la Forêt. Je peux me promener dans ton livre (il me tarde d'en lire les épreuves) et c'est toujours la même impression de richesse, d'ombre étendue, d'orage. C'est le Wuthering Heights intérieur, inverse[37] .

ソレルスとドミニク・ロランは 1958 年 10 月、「テル・ケル」誌出版元のスイユ社主催のレセプションで出会った。その後、1958 年 12 月から 2008 年 8 月までの間に 2 人が交わした膨大な量の手紙が近年相次いで刊行された[38]。そのうちのソレルスがドミニク・ロランに宛てた手紙には、自らのさ

35）ドミニク・ロランの小説（1965 年刊行）の題名。Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1958–1980*, *op. cit*., p. 108. La lettre du 29 mars 1964. ＊引用の手紙文中の下線は原文のまま。以下同じ。

36）*Ibid*., pp. 107–108.

37）*Ibid*., pp. 125–126. La lettre du 11 janvier 1965. “Wuthering Heights”は『嵐が丘』。

38）Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1958–1980*, *op. cit.*, Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1981–2008*, Gallimard, 2019. Dominique Rolin, *Lettres à Philippe Sollers 1958–1980*, Gallimard, 2018. ソレルスと出会った当時、ドミニク・ロランは既にフランス文壇に確固とした位置を確立した小説家であり、フェミナ賞の審査員も務めていた。ソレルスからの手紙はそのほとんどが、ソレルスが春・夏を過ごしたレ島 Martray の別荘に滞在していたときに書かれたものである。ソレルスは書簡集が、自分よりも小説家であったドミニクの手紙のお陰で美しい小説（ロマン）になるだろうと語っている（*Philippe Sollers, Josyane Savigneau, Une conversation infinie*, Bayard, 2019, p. 24）。ソレルスはかつて自作に、シャトーブリアンに宛てた男爵夫人クレール・ド・デュラスの愛の手紙を引用していることからも、フランス書簡文学の系譜を意識していたことは間違いないと思われる。

まざまな身辺の出来事、1962 年ベルフォール軍事病院での悲惨な日々のことや[39]、1967 年のクリステヴァとの電撃的結婚、1974 年の中国行などについても語られているが、それ以上にこれらの手紙は、「作家ソレルス」の創作の内実を伝える貴重な記録になっている。ソレルスは、自らが最初の小説と認める『ドラマ』をドミニク・ロランに捧げている。上に引用した手紙から、この作品の執筆がドミニク・ロランの存在およびその作品と不可分の形で進められていたこと、ソレルスの創作活動において、ドミニク・ロランの存在とその作品が文字通り不可欠であったこと、そしてそれが双方向のものであったことが分かる。以後、ソレルスの手紙の中では、自身の作品とドミニク・ロランの作品とが交互に語られることが多くあり、それらは互いにフーガのように響き合っているのが見られる。エクリチュールを生み出すための苦闘、弱気や絶望感、そして時に訪れる高揚感は、手紙に書かれることで鏡に映った像のようにただちに共有されて相手のものともなるのであり、手紙を介して 2 人のエクリチュールが双方向に開かれていることが分かる。

> Pour moi, dans ces parages, la sensation « d'infini » devient tellement pressante que Drame m'y apparaît comme un vague balbutiement médiocre. Je finis par n'y tenir qu'à cause de toi et de ce que tu m'en dis. Car, en relisant, je suis parfois effrayé par la sécheresse, l'abstraction de l'ensemble (y aura-t-il quelqu'un pour lire ça ?)[40] .

> (...) : on est seul avec le vide de l'illimité, perdu, sans identité...Tout à fait l'impression d'avoir transformé la planète en une grande salle silencieuse d'études, de jeux, d'expériences... (...). De temps en temps,

39）1962 年、それまで喘息疾患のために兵役を免除されていたソレルスは、召喚されて送られた軍事病院で治療も食事も断ち、精神病を装って戦場に送られるのを拒否した。その間の経緯は *L'intermédiaire*, Éd. du Seuil, 1963, coll. « Points Essais », 2001 に詳しい。

40）Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1958–1980*, *op. cit*., p. 120. La lettre du 22 juillet 1964.

j'attrape mon livre au vol (comme un air de musique oublié) — et puis il retombe[41)] .

また手紙は、次のムージルの『特性のない男』の場合のように、共通の読書体験から執筆のための貴重なヒントを引き出す場ともなっている。

D'accord avec toi sur Musil — dont les « digressions » sont parfois nettement empêtrées. Mais il y a le noyau luminieux Ulrich/Agathe = « règne millénaire »（extase) et, là, c'est la merveille. C'est une des « moëlles » que j'aurais voulu extraire pour Drame (traiter l'androgynat primordial...）[42)] .

ソレルスは「テル・ケル」 23 号誌上にダンテ論を掲載し[43)]、その中でダンテについて「問題にすべきなのは、テクストの外見でも内容でもなく、ダンテがエクリチュールに対して保ち続けた深い関係である」と言っており、そこには自身のエクリチュール論とダンテとの接点を探っている様子が窺える。自作『天国』の題名を『神曲』から取っていることからも分かるように、ダンテを最も偉大な文学人として崇敬しているソレルスは、自分の作品がダンテやウェルギリウスの高みに達することを夢見るものの、無謀な企てに自信を喪失しては手紙の中で焦りを告白している。

Je lisais Virgile, Dante. Grosse imprudence. Comment prendre au sérieux mes lamentables efforts ? J'aimerais, pour ce livre, être capable, d'un seul trait, d'une épopée sans exemples. Mais ce que je relis de moi

41）*Ibid*., p. 123. La lettre du 27 juillet 1964.
42）*Ibid*., p. 114. La lettre du 17 juillet 1964.
43）« Dante et la traversée de l'écriture », *Tel Quel* n° 23, 1965, repris dans *L'écriture et l'expérience des limites*, Éd. du Seuil, coll. « Points Essais », 2007, p. 15.

me laisse accablé. Petites ouvertures, petites réalités... je me sens porteur, comprends-tu, d'une chose immense dont je désespère d'être jamais l'auteur[44] .

(...), c'est l'œuvre capitale de notre culture, et sans doute, la plus grande œuvre littéraire de tous les temps : si j'arrivais à prouver ce que je veux prouver à son égard, le tour serait joué, (...)[45] .

1962 年 7 月 12 日、ソレルスはバタイユが亡くなったことを告げる手紙をドミニク・ロランに書き送っている。ソレルスは、後に「テル・ケル」主催の「アルトー／バタイユ討論会」で、バタイユが「テル・ケル」編集部を訪れた時のことを回想しているほか[46]、その後も頻繁にバタイユについて語っているが、その死の直後の手紙からはバタイユの存在がソレルスにとってかけがいのないものであったことが切々と伝わってくる。

En ouvrant le Figaro, hier, j'ai été frappé par ces dix lignes anonymes « L'écrivain Georges Bataille etc... », au point de croire à une erreur, à une homonymie improbable, à une sinistre plaisanterie. (...). Je revois, si proche, devant lui, son geste de la main, comme pour congédier les mots... Et le rire, dans les yeux, ne s'adressant plus à personne. Je n'arrête pas de penser à lui, en regrettant de ne pas l'avoir connu avant cette période de dérive, où il était, j'imagine, complètement seul, léger, oublieux, tourné vers une autre logique que la nôtre. Grand Bataille, tellement plus fort que les autres...[47]

44）Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1958–1980*, *op. cit*., p. 77. La lettre du 18 avril 1962.

45）*Ibid*., p. 131. La lettre du 17 juillet 1965.

46）Philippe Sollers, « L'acte Bataille », *Tel Quel* n° 52, 1972, repris dans *Bataille*, UGE, coll. « 10/18 », 1973, p. 11.

47）Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1958–1980*, *op. cit*., p. 79. La

同じ頃、イスラムの神秘思想家、イブン・アラビ[48]の著書に夢中になっていることが書かれており、これはおなじ神秘思想家、エックハルトへの傾倒と共通するものであり、ソレルスのエクリチュールの根底にあるものを示唆している。イブン・アラビの名前と引用は、手紙の中のおびただしい数の西欧作家の名前と引用の中にあってもいささかも輝きを失うことなく明瞭に主張をしている。オリエントはここにあって、架空のおとぎ話でも飾り物でもなく、参照するべき実体としてあるのだ。

2.2. エクリチュールの窓

ソレルスのエクリチュールが最初期から中国との深い関わりのうちに生み出されたことはこれまでも見てきたが、その点についても、ドミニク・ロランへの手紙は多くのことを教えてくれる。小説（ロマン）『数（ノンブル）』を経て『法』に至る時期はソレルスの中国熱が高まった時期でもあり、多くの手紙にそれが反映されている。

> Ma fascination, en ce moment, revient sur la Chine — et je reprends comme je peux ma « lecture » du chinois — langue étonnante, massive, et qui permet de passer « dans les coulisses » de notre langue pour en déchiffrer le sol, l'articulation.
>
> Voici, par exemple, justement, le Corps :
>
> 身 Shen
>
> (quel silence !)[49]

毛沢東詩に秘められたエロティックな要素の奥深いはたらきに思いを巡ら

---

lettre du 12 juillet 1962.

48）*Ibid*., pp. 104, 113. Les lettres du 20 juillet 1963 et du 13 juillet 1964.

49）*Ibid*., p. 148. La lettre du 15 juillet 1967.

す手紙には、早くから中国文化のエロティックな側面に惹かれていたソレルスがいる。同じ手紙の追伸には内務省をも巻き込んだ発禁書騒動、エデン・エデン事件について書かれており、「テル・ケル」が、バルト、フーコーらと歩調を合わせて抗議行動を繰り広げた当時の文学状況が垣間見られる。

> Je pense que tous les poèmes de MTT ont une inscription érotique secrète qui, de toute façon, intervient dans le tissu même de la langue. Sous la politique, la mythologie, etc... se glisse et court cette circulation sexuelle laquelle s'évanouit elle-même ou plutôt se résume en disparaissant dans le tracé toujours vide et recommencé —[50)]

> Donc Cl. G. commence à « reculer » sur l'affaire P. G. (probablement sentant qu'il a fait une connerie). Il faut être très prudent, tout est certainement lié (...)[51)] .

次の手紙では、思考は表意文字である漢字の 1 文字「精」の考察から道教へと広がっていき、不死の石・翡翠のイメージと交わって、月面着陸のニュースを飛び石にしてマラルメの詩句とともに地上に降り立つ。そして大空に広げられた織物のように、思考は西洋と東洋両方にまたがって境目なく展開していく。

> Sais-tu comment le chinois écrit « sperme » ?
> Ainsi : 精

50）*Ibid*., p. 162. La lettre du 8 juillet 1969. MTT は Mao Tsé-Toung（毛沢東）のこと。

51）*Ibid*., p. 162. Cl. G. は Claude Gallimard、P. G. は Pierre Guyotat のこと。1969 年、「テル・ケル」誌がピエール・ギヨタの『エデン・エデン・エデン』の抜粋を載せると、内務省は 18 歳以下への販売を禁止した。翌年、ソレルスとバルト、ミシェル・レリスの序文をつけて刊行され、ミシェル・フーコーは『ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール』誌に擁護記事を載せている。

où l'on reconnaît, dans le caractère de gauche le riz. L'ensemble pourrait être aussi traduit par essence, c'est le caractère de tout ce qui est très pur, très bleu (eau, ciel). Le taoïste, en « nourrissant son essence », régénère son cerveau, il vit, en somme, en circuit fermé et ouvert sur le vide, tâchant de trouver le souffle embryonnaire, celui du fœtus dans le ventre maternel et, de là, le corps de jade (immortel). On reconnaît, je pense, dans le jade, quelque chose comme la vitrification du sperme et de la cervelle, la matière nerveuse devenue ciel/eau/pierre — c'est mon interprétation. La lune : énorme histoire, mais c'est, en fait, sur la terre qu'on a posé pour la première fois le pied, un pied isolé, caché — et, la terre devenant surface, où est le « talon nu » de Mallarmé :

M'introduire dans ton histoire
C'est en héros effarouché
S'il a du talon nu touché
Quelque gazon de territoire/[52)]

ソレルスの中国愛は、中国―フランス軸を夢見させ、さらには東洋／西洋の総合化を夢想させる。東洋を重んじるソレルスの場合、それは西洋の権威主義による東洋統合へと向かうことはない。すべてはフーガのように構築されなければならないのだ。ソレルスの究極の夢は、「最後の中国人」を自称することなのである。

Mon rêve : un « axe » (culturel, d'abord) Chine-France. Ça avait l'air complètement utopique...Mais on verra...[53)]

Synthèse orient/occident : c'est le rêve absolu du point-clé de la

52）*Ibid*., pp. 170–171. La lettre du 22 juillet 1969.
53）*Ibid*., p. 228. La lettre du 25 juillet 1972.

planète... (...). Je vais me mettre un peu au bouddhisme, maintenant (il faut varier ma palette) ... Tout doit se construire comme une fugue à plusieurs canons...[54)]

Le comble serait qu'un jour tout le monde soit traduit en chinois sauf moi. Ce qui serait logique, au fond, et me permettrait, avec sang-froid, d'affirmer que je suis le dernier Chinois (je cois être le seul écrivain occidental d'un peu d'envergure qui parle sans cesse de la Chine)[55)] .

†

1974 年に中国から帰国後、周囲の非難に逆らうようにソレルスの中国熱は一層深まり、内在化していった。創作の上でも、漢字使用のような目に見えるかたちでの「中国」文化の取り込みから、深くエクリチュールに密着した方向に変わっていき、句読点がなく切れ目のない新手法による、リズム感に充ちた『H』、『天国』が生み出されていったのである。このような実験的な試みは意気込みと同時に焦りをも伴い、手紙にはそうした感情がにじみ出ている。

Mais j'espère que ma technique s'approfondit, se colore, se détend et s'étend. L'absence de ponctuation était la seule façon d'opérer, je ne sais pas ce que ça donnera pour finir, peut-être un gros bloc de ciment opaque, bien qu'à mon avis tout soit au contraire aéré, fluent, habité...[56)]

54) *Ibid*., pp. 347–348. La lettre du 11 août 1979.

55) Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1981–2008*, *op. cit*., p. 250. La lettre du 6 juillet 2001. ＊「最後の中国人」はジョージ・サンタヤナの『最後のピューリタン』を連想させる。

56) Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1958–1980*, *op. cit.*, pp. 282–283. La lettre du 24 juillet 1976.

ソレルスはレ島を「自分にとっての中国」と呼んでいるように[57]、レ島の自然を心から愛しており、執筆は塩田の乾燥状況を気にかけ、かもめに囲まれながらレ島の自然に支えられて進められている。そのようなソレルスにとって、常に仕事の上での、生きる上での羅針盤は大熊座である。それが見えないとき、『天国』は突然「読めない」ものになり、再びそれを見つけたとき、エクリチュールが、愛が甦る――。大熊座はドミニク・ロランなのだ。ソレルスは『天国』を書き終えたとき、そこに「中国」を含むすべてが込められていることを確認して満足する。

> Je me lève à quatre heures du matin, la Grande Ourse est invisible, je lis un fragment d'Isaïe... J'ouvre mon Paradis qui, tout à coup, me paraît saugrenu, invraisemblable, illisible, une énorme maladie posée là, devant moi...[58]

> Comme un OVNI, un satellite bien lancé sur orbite et qui, maintenant, tourne à jamais... À JAMAIS ! Il est là. La Grande Ourse est là, elle aussi, encore sur la droite (en juillet, elle passe à gauche). Voilà. Les astres et l'écriture, le reste est silence. Le reste, c'est l'Amour[59] .

> J'ai terminé hier soir la relecture intégrale de mon Paradis (1981). (...) C'est trop vrai. Trop vrai, parce que tout y est : Bible, Évangiles, Coran, Inde, Chine (...)[60] .

57）*Lettres à Dominique Rolin 1981–2008*, *op. cit.*, p. 223. La lettre du 22 avril 1999. レ島については註 38 を参照されたい。

58）Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1958–1980*, *op. cit.*, p. 346. La lettre du 10 août 1979.

59）Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1981–2008*, *op. cit.*, p. 79. La lettre du 1 avril 1986.

60）*Ibid*., p. 174. La lettre du 18 août 1994.

書簡集2巻目の最後の何通かには、ドミニク・ロランの新作の構想への感想とともに、ドミニク・ロランの健康を気遣う言葉が欠かさずに書かれている。そしてそれらの文章にリズムを与えている一言、“grâce-à-toi”――。祈りにも似たリフレインはフーガとなって、本の終わった先へと続いている。ソレルスの言葉のとおり、手紙の中味はすべてソレルスの本の中にあるのだ。

> Grâce-à-toi, en tout cas, je ne te le répéterai jamais assez, (...)[61].
> Mouettes, comme toujours impassibles. Elles m'aident, comme le grâce-à-toi[62].
> Domi : tu es là, et tout a lieu grâce à toi[63].
> Ce que je te dois, minute par minute, est incalculable. C'est le Temps. Qu'est-ce que c'est ça, le Temps ? (...) C'est nous à travers les mots et les pages. Nous-musique : tu entends ? Fais bien attention à toi, Trésor ! Mes lettres doivent te paraître pauvres et répétitives, mais je mets tout dans mon livre, pour toi et grâce à toi[64].

2.3. Musique !

ソレルスはドミニク・ロラン宛ての手紙の中で、しばしば“musique”の一語をさまざまな折に、さまざまなかたちで書きつけている。幼時の耳の疾患によって聴力が鋭くなったと自身で語っているように、音楽に深く沈潜した体験はそのままソレルスのエクリチュールに生きていると言えよう。ソレルスは、自分を音楽によって創作する数少ない作家の1人であると自負している[65]。ソレルスの文章については、しばしばその音楽的なリズムの美し

61）*Ibid*., p. 299. La lettre du 18 août 2006.
62）*Ibid*., p. 304. La lettre du 16 juillet 2007.
63）*Ibid*., p. 305. La lettre du 17 juillet 2007.
64）*Ibid*., pp. 315–316. La lettre du 30 juillet 2008.
65）« Peut-être suis-je un des seuls écrivains à écrire selon la musique moderne ? », *Lettres à Dominique Rolin 1958–1980*, *op. cit*., p. 248. La lettre du 16 juillet 1974.

さが言われるのも故のないことではないだろう。手紙の中には、モーツアルトを初めヘンデル、ハイドン、モンテヴェルディなどのほか、パーセル、ジェズアルドに及ぶ多彩な作曲家群が登場する。そしてソレルスにあっては、音楽も「中国」と切り離せないのである。中国の無化の思想に思いを巡らせる時、幼時に目にした竹林の記憶から尺八を想起しては変化・転調の概念へと導かれる。そしてそこにモーツアルトの名を書き加えることを忘れないのだ。

> La splendeur immobile ou agitée, c'est ça : un grand corps qui voudrait s'annuler, qui n'y arrive pas à cause de nous, et qui, du coup, bouge et brille. Les Chinois ont compris ça de tout temps. D'où ma passion pour eux. Le bambou, tube creux, cannelé, où passe le souffle, le vide (c'est aussi la clarinette de Mozart juste à la fin de sa vie), dit simplement, affirme, que tout n'est que modulation. Être dans la vérité, c'est entendre, être modulé [66] .

ソレルスは小説(ロマン) *Passion fixe* で、荘子とバッハを並べてオマージュを捧げている。「死の征服者」[67] バッハは「神」なのであり、そしてソレルスの究極の選択はバッハと「中国」になるのである。『時間の旅人』[68] の著者ソレルスにとって、「音楽」は時間と切り離せない関係にあり、それは「時間の中に音楽があるのではなく、音楽の中に時間がある」というオリヴィエ・メシアンの言葉に集約される。そしてそれはエクリチュールと切り離せない。「音楽を、言葉の華を呼び寄せるために沈黙を、どこまでも沈黙を」とソレルスは呼びかける。

> Quelle joie ! Ce Bach est vraiment un énorme mystère...Rien que pour

66）*Ibid*., p. 243. La lettre du 10 juillet 1974.
67）Philippe Sollers, *Un vrai roman, Mémoires*, *op. cit.*, p. 74.
68）Philippe Sollers, *Les Voyageurs du temps*, *op. cit.*

relever le défi, j'ai envie de n'en plus finir de remplir des pages et des pages touffues de Paradis, canons, fugues, préludes — canons renversés « à l'octave » (mon père !). Chorals — CANTUS FIRMUS, on appelle ça...Shamouth, tout dans la musique ! C'est dans la musique qu'on s'est éclipsés tous les deux, non ?[69)]

La seule musique qui résiste ici, c'est Bach. (...). C'est lui qui a la plus grande ouverture dans la plus stricte limite. C'est l'homme des lumières, c'est Dieu. (...). Bach, et la Chine. Voilà mon choix[70)] .

J'écoute des entretiens passionnants avec Olivier Messiaen. « La musique n'est pas dans le temps, le temps est dans la musique. » Expérience, non ?[71)]

(...) silence et encore silence pour laisser venir la musique, la fleur des mots[72)] .

1994 年 8 月、ソレルスは手紙の中で、『ルーヴルの騎手』[73)] 執筆のためにシャトーブリアンの『墓の彼方の回想』[74)] を読み直したことを伝えている。シャトーブリアンはフローベールと並んでサイードが『オリエンタリズム』

69）Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1958–1980*, *op. cit.*, p. 365. La lettre du 5 août 1980. "Octave" はソレルスの父親の名前である。"Shamouth" はドミニク・ロランの愛称。

70）Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1981–2008*, *op. cit.*, p. 228. La lettre du 31 juillet 1999.

71）*Ibid*., p. 97. La lettre du 29 mars 1988.

72）*Ibid*., p. 235. La lettre du 4 juillet 2000.

73）Philippe Sollers, *Le Cavalier du Louvre*, Plon, 1995; Gallimard, coll. « Folio », 1977.（『ルーヴルの騎手』菅野昭正訳、集英社、1995 年）。

74）フランソワ＝ルネ・ド・シャトーブリアン『墓の彼方の回想』真下弘明訳、勁草出版センター、1983 年。

の中で度々言及している作家である。ソレルスは『墓の彼方の回想』を傑作と断言し、その描写力に感嘆した上で、ここでもそれを音楽と並置してみせる[75]。ソレルスの論法は、ヘンデルとナポレオンを並べ、ヘンデルはその苦しみを認めようとしない音楽によってナポレオンを、さらにはヒトラー、スターリンまでをも打ち負かしたというのである。累々と築かれる兵士の屍体に無関心だったナポレオンは、ヘンデルには勝てない、と。ここではナポレオンは、『オリエンタリズム』とは異なる視点から捉えられているが、ソレルスの発想は幾分突飛に見えるとしても、説得力がないとは言えない。

> Oui, Haendel : il a une certitude à lui, jamais de souffrance (...). Napoléon a finalement été battu par Haendel. Hitler et Staline aussi. Ce qui est extraordinaire, dans le récit que fait Chateaubriand de la retraite de Russie, c'est l'indifférence de Napoléon devant les cadavres qui s'accumulent peu à peu sous ses yeux. Ces gens ne voyaient pas les morts, le gaspillage humain, rien. Les choses ont-elles changé ? On peut se le demander. L'insensibilité est un grand mystère[76] .

3.0. 結び

3.1. La Vie contrepoint

ソレルスは近年になっても、毛沢東の「1 は分かれて 2 に」を口にする[77]。あたかも「1」の専横を認めまいとする信念からとでも言うように。ソレルスの毛沢東に対する態度は両義的である。その政治的暴挙に対する歴史の断罪は認めつつも、戦略家・毛沢東と文人・毛沢東の落差の大きい二面性に強

75）Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1981–2008*, *op. cit.*, p. 170. La lettre du 30 juillet 1994.

76）*Ibid*., p. 173. La lettre du 3 août 1994.

77）2017 年、筆者がソレルスにインタビューした際にも、中国への関心の根拠の 1 つとして挙げている。（前掲「フィリップ・ソレルスへのインタビュー」『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』N° 66, 2018 年 3 月, p. 126）。

く惹かれているのである。そしてそれを否定しない。毛沢東の伝記を受け取ったソレルスは、そこに描かれた卓越した軍人でありかつ歴代の暴君に列する毛沢東と、唐詩に没頭する毛沢東とをいずれも許容するのだ。

> La grosse biographie de Mao, que j'ai reçue ici, est tombée à pic. L'Histoire est encore plus ahurissante que je croyais. Crime et génie, dans le style des grands empereurs du passé. C'est violent, guerrier, fabuleux, et, chose étrange, d'une constante poésie intense. J'ai eu raison d'avoir cette passion chinoise. Je l'ai toujours[78].

> La biographie de Mao est un grand roman passionnant et terrible. La Chine est dans un état chaotique et sanglant, (...). Bien entendu, c'est loin d'être un ange, mais c'est la détermination militaire qui saute aux yeux (grand stratège, inventeur inouï sur ce plan). Et puis, au repos, silence et lecture des poètes classiques Tang (8ème siècle)[79].

「テル・ケル」誌は 1974 年、毛沢東主義のまっただ中にいた当時、ジョゼフ・ニーダムへのインタビュー記事を掲載している[80]。大著『中国の科学と文明』の著者はその際に、人間の未来にとって中国、とりわけその美学と倫理が重要であると強調しただけでなく、毛沢東の思想は道教に近いのではないかとの「テル・ケル」の質問に対して、実際に毛沢東の詩を引いて、その内容は道教以外の何ものでもないと断言している[81]。ところで後年ソレルスは、ドミニク・ロランに宛てた手紙の中で次のニーダムの言葉を引用している。

78）Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1981–2008*, *op. cit.*, p. 283. La lettre du 5 juillet 2005.

79）*Ibid*., p. 285. La lettre du 12 juillet 2005.

80）Joseph Needham, « Entretien », *Tel Quel* n° 59, 1974.

81）*Ibid*.

> Needham écrit que si nous ne mettons pas un terme à l'orgueil occidental et à son ignorance crasse de l'Asie « notre civilisation sera mise au ban de l'histoire comme dénaturée et mauvaise, incapable de mettre en pratique ce qu'elle proclamait, et méritant la condamnation de dix mille générations. »[82)]

西洋文明のおごりに対して警告を発しているその内容は、そのままサイードが『オリエンタリズム』に引用していたとしてもおかしくないものである。サイードは、ヴィーコが民族と学者のうぬぼれについて述べている箇所を『オリエンタリズム』中に引用しているからある[83)]。ソレルスは、毛沢東と唐詩が一体となった世界に強く惹きつけられる一方で、西洋に警告を発するという点ではニーダムを媒介としてサイード、そしてヴィーコと同じ側に立っているのだ。

†

「作家ソレルス」の活動は、その出発点から、本名フィリップ・ジョワイヨーから分かれてフィリップ・ソレルスをジョワイヨー本人と対置するかたちで展開されてきた[84)]。そして相対するものを並置する方法は、ソレルスの作家活動の基盤をなしている。西と東の並置、男と女の並置、さらにはソレルスがしばしばその小説（ロマン）中で使う名詞の男性形・女性形の並置等々——。これらにおいては、並置されるものは互いに対立に向かうことはなく、一方が他方より優位を占めることもなければ、ましてやどちらか一方が他方に対し

82）Philippe Sollers, *Lettres à Dominique Rolin 1958–1980*, *op. cit.*, p. 246. La lettre du 12 juillet 1974.

83）前掲『オリエンタリズム　上』p. 126。ヴィーコ『新しい学』清水幾太郎編、清水純一・米山喜晟訳、中央公論社「世界の名著 33」1995 年、pp. 115–116。

84）文壇デビュー当時未成年であったソレルスは、自ら「ソレルス」（全身芸術の意）というペンネームを考えた。“sollers”はラテン語の“sollus”（完全に）と“ars”（芸術）を組み合わせたもの。

て侵略を行うということは決して起こらない。いかなる場合にも双方の特異性を尊重し、異質な個を認めようとする暗黙の了解があるのだ。それというのもソレルスにとっては、「中国」がなければ西洋もなく、女性がいなければ男性もいないのであり、それは生死の問題であると同時に、エクリチュールの問題であるからだ。ソレルスのエクリチュールは、中国をも含むあらゆる文化を吸収することによってのみ成り立つ双方向のものなのである。それは、各声部が独立した旋律とリズムを持ったまま調和するポリフォニーの世界であり、バッハを愛するソレルスには限りなく近しい世界である。

対位法においては、「1つ1つの音が水平面上に1つの過去と1つの未来を持っていなければならない」[85] と言われる。人間においても同じことが言えるとすれば、また「人間は自分自身の歴史をつくる」のであり、「人間が認識しうるのはみずからのつくったものだけ」(ヴィーコ)[86] であるならば、異なる個の働きによってのみ歴史はつくられるということになるだろう。ソレルスはその対位法的あり方にこだわり、特異性に格別の重要性を付与することで、西洋／東洋の不毛な争いの彼方に思いを致すように促しているように思われる。ソレルスのメッセージは次第に警告の度を強めてきており、遺言の様相さえ帯びている。時間がないのだ、と。

> (...) à moins que vous ne vouliez pas le savoir, tout indique que la planète Terre est en train de devenir invivable pour la vie humaine[87] .

—完—

85) « The nature of the contrapuntal experience is that every note has to have a past and a future on the horizontal plane. » Glenn Gould, *The Glenn Gould Reader*, edited and with an introduction by Tim Page, Lester&Orpen Dennys Publishers, 1984, p. 36.(『グレン・グールド著作集 1』ティム・ペイジ編、野水瑞穂訳、みすず書房、2003 年)。

86) 前掲『オリエンタリズム　上』p. 21 からの孫引き。

87) Philippe Sollers, *Désir*, Gallimard, 2020, p. 84.